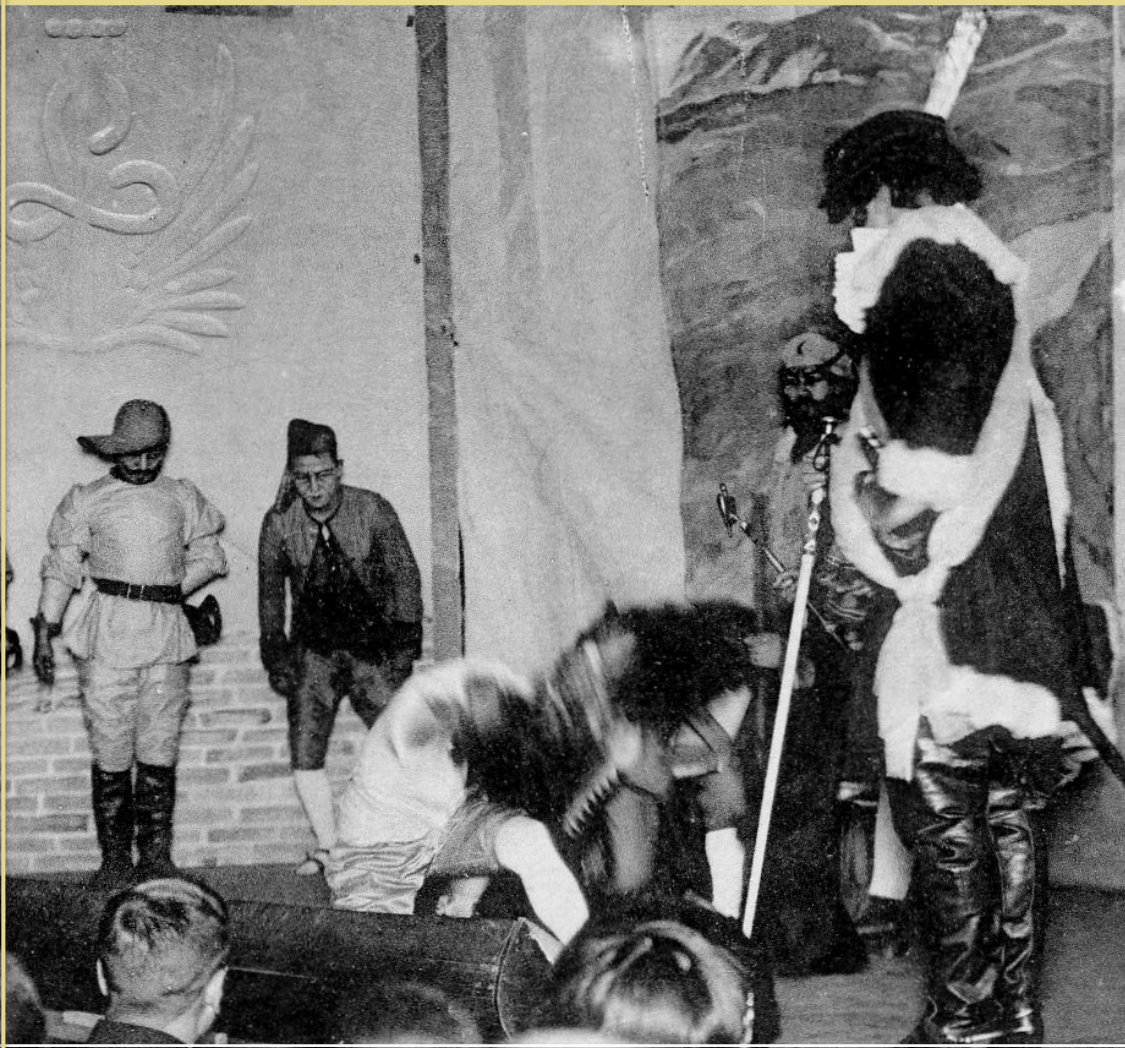


外国人講師エスパーダと東京外国語学校

東京外国語大学文書館企画展

東京外国語大学スペイン語教育120年



TUFS Archives

今から120年前の1897年、本学の前身、高等商業学校附属外国語学校が設置され、そこに日本初のスペイン語教育課程となる西班牙語科が誕生しました。

本企画展では、日本におけるスペイン語教育の歴史といっても過言ではない本学のスペイン語教育の歴史と、1907年から1916年の9年半にわたり第3代スペイン語外国人講師を務めたゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパーダGonzalo Jiménez de la Espada(1874-1938年)の業績について紹介します。

- 開催場所：附属図書館1階ギャラリー
- 開館時間：平日 9:00～21:45
土・日・祝日 13:00～18:45
※附属図書館開館日に準ずる



【上】絵葉書(1919年史劇『調高矣洋絃一曲』西語部)
【左】1916年エスパーダ講師とスペイン語学生たち

東京外国語大学スペイン語教育の歴史

I 附属外国語学校の創設・独立とスペイン語教育の始まり

日清戦争後に海外進出熱が高まるなか、1897年高等商業学校(現：一橋大学)に附属外国語学校が設置されます。同校には7語科が置かれ、その一つとして日本初のスペイン語教育課程となる西班牙語科が誕生しました。同年9月には日本人最初のスペイン語教師である桧山剛三郎助教授が着任し、第1期生正科6名、特別科11名の教育に当たりました。翌年には初代外国教師であるフランシスコ・グリソリアが着任しました。

東京外国語学校が独立した1899年には西語学科と改称され、篠田賢易が新たに講師として着任し、グリソリアが読み方・作文・会話、桧山がスペイン史、篠田が訳読を担当しました。1900年には第1期生の金沢一郎、波多野元治、伊藤信一が卒業し、金沢は翌年外務省勤務を経て講師に着任します。その後、1902年末には留学中であった村上直次郎教授も帰国し、第3代校長に着任するまでの6年間のスペイン語教育に携わりました。



独立時までの学舎、神田錦町の分教場

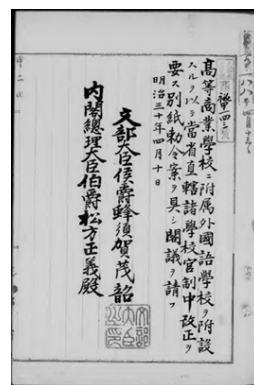


スペイン語主任を経て校長となった村上直次郎

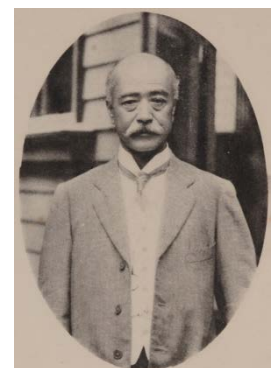
1897年の高等商業学校附属外国語学校設置とその目的

日清戦争後、日本では海外事情に精通する「外国語ニ熟達スルノ士」の養成が議論されます。1896年帝国議会に「外国語学校設立二関スル建議」が提出されると、翌年4月22日には高等商業に附属外国語学校が創立されました。

規則第1条では「高等商業学校附属外国語学校ハ欧州及東洋近世語ヲ教授スル所トス現今ニ於テハ英語、仏語、独語、露語、西班牙語、清語、朝鮮語ヲ教授ス」とされ、修業年限3年の7語科が置かれました。校長は置かれず、高等商業学校教授の神田乃武が学校主事としてその整備に当たりました。



【左】「高等商業学校に附属外国語学校を附設するを以て当省直轄諸学校官制中改正を要す」『公文類聚・第二十一編』



【右】神田乃武学校主事

Ⅱ 最初期のスペイン語の卒業生たち

最初期の西語科には約5-6名の入学者があり、1902年頃からは入学者が20名台に急増し、その後日露戦争の影響からか募集が実施されなかった1905年を除き、毎年一定の入学者がありました。西語学科卒業生の多くは、商社・商船会社・移民会社に進み、海外勤務者も多数いました。1908年に笠戸丸に乗船し第一回ブラジル移民として海を渡った移民たちの通訳に当たったのは西語学科中退者・専修科修了者たちであり、この後もブラジルやペルーに移住する西語科学科卒業生は少なくありませんでした。また明治末期・大正初期から陸海軍より将校が依託学生として派遣され、スペイン語選科生として本学で学び、修了者は主に中南米の駐在武官となりました。



【左】写真左上から順に嶺昌、大野基尚、平野運平、加藤順之助、仁平嵩。出典：香山六郎編著『移民四十年史』（1949年）所収



【右】1921年麴町区元衛町に建設された新校舎。3階建てのモダンな造りでしたが、1923年の関東大震災により全壊してしまいます

最初期のスペイン語教授 篠田賢易(1871-1918年)

愛媛県出身。中学校卒業後、在日フランス人外交官使用人となり、その帰国に伴い19歳で渡仏。同外交官のアルゼンチン赴任に同行し2年間滞在しスペイン語を修める。1899年東京外国語学校西語学科講師に着任。1908年より西語学科主任教授を務める。最初期には教科書がなかったことから、スペイン語教育法・教材の検討を行い『西語初歩』（1915年）を出版。1918年47歳の若さで急逝。【右】篠田賢易教授の近影(『Salve Schola』(1911年アルバム)所収)



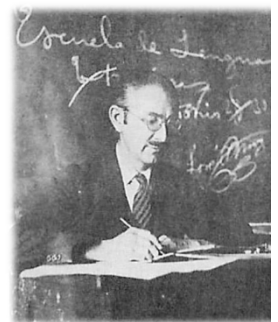
易賢田 教授

スペイン語外国人教師たち

初代のスペイン語外国人教師は、スペイン政府の紹介で派遣されることとなったフランシスコ・グリソリアで、1897年12月に来日し、1903年7月まで学生たちの指導に当たりました。その後、2代目には1903年10月よりエミリオ・サピーゴが、3代目には1907年1月よりゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパーダが着任しました。

1917年に第4代外国人教師となったホセ・ムニョス・ペニャルベルは、戦中・戦後を挟み1966年まで本学におけるスペイン語教育に従事しました。その間、彼はスペインには一度も帰国せず、日本人と結婚し晩年には日本に帰化しました。

【右】第4代外国人講師 ホセ・ムニョス・ペニャルベル



Ⅲ 西語部文科・貿易科・拓殖科の設置

第一次大戦後の教育改革のなか、1919年東京外国語学校では、各語学科を語部へと改編し、各語部に文科・貿易科・拓殖科の3科を置く教育課程の再編が進められました。

翌1920年より募集の始まった西語部3科には、貿易科12名、拓殖科12名、文科3名の計25名が入学します。同年の西語部入学志願者は貿易科121名、拓殖科52名、文科6名であり、スペイン語学習を志す若者の関心は貿易・商業にあったことが伺えます。その後も貿易科が多数を占め、西語部の卒業生は総じて実業界への進出が多くみられました。

第1期卒業生にして西語科主任教授を務めた金沢一郎は、昭和初期の不況時にも生徒の就職の世話をするなど学生の面倒見がよく、1936年同窓生有志の手で校内(竹平町)に胸像が立てられました。この胸像は1944年に金属供出され、今日には伝わっていません。



【左】1920年詩劇『王なればこそ』 西語部(第3回語学大会絵葉書)



【右】1940年頃「西語第三学年」教室前で煙草を吸う学生(『(1942年アルバム)』所収)

Ⅳ 戦時下の西語部

1938年4月国家総動員法を受け、同年6月文部省は「集团的勤労作業運動実施に関する件」を發布し、学生たちの勤労働員が始まります。また1941年10月には文科系学生の徴兵猶予が廃止されると、授業は閑散としたものになっていきます。

他方でスペイン語部1942年9月卒の学生らは、卒業年の5月、前年から修業期間が半年間短縮され、9月の卒業と入営が決定していた彼らは、日頃「ほの暗い教室で面白くもない教師の十年一日の如きマンネリ講義を聞かされている」ことへの鬱憤を晴らすために授業をサボタージュして大菩薩峠(山梨県)への遠足を強行した。クラス27名中21名が参加し、入営前の学生生活を楽しんだといえます。

1944年3月末東京外事専門学校への改称に伴い、各語部は東洋語を中心とする第一部と西洋語の第二部に分かれます。西語部は葡語部とともに東洋語の第一部に含まれ、イスパニヤ科と改称されます。また外事専門学校時代には1945年より4年間だけフィリピン科が設置され、イスパニヤ科の主任になる笠井鎮夫(1919年卒)がタガログ語を担当しました。



1940年頃軽井沢への軍事教練の様子



1942年頃笠井鎮夫教授授業風景

V 戦後の新制大学の設置と入試高倍率のスペイン語科

新制大学の発足に伴い、1949年イスパニヤ科はイスパニヤ学科と改められ、1951年には学則改正に伴い従来の12学科が7部へと再編され、イスパニヤ学科は第五部第一類と改称されます。その後、1961年にはスペイン科、1964年にはスペイン語学科へと改称されます。

戦後の外国語需要の高まりのなか東京外国語大学には多数の入学志願者が集り、入試は高倍率となります。スペイン語も特に人気が高く1955年には37倍を記録します。そのため新制大学発足当初の1949年30名であった定員は、翌年には40名に増員され、1957年には60名に大幅増員されます。定員増に伴い授業は二クラス制で実施されるようになります。



【左】1945年城北大空襲により西ヶ原に建造された新校舎はわずか1年で焼失してしまいます。戦後は上野の美術学校に一時間借りし授業を再開し、ほどなく板橋区上石神井(智山中学校校舎の一部)に一時移転しました。

【下】就職状況を伝える『東京外国語大学新聞』(41号1面(昭和32年10月20日)) 1957年(昭和32)のスペイン語の就職率が94%と他に比べ非常に高い様子が確認できます。

就 職 率 10月23日現在

	卒業見 込者数	就職希 望者数	決 定 者 数	就職率
英 米	70	66	29	44%
フ ラ ン ス	25	21	9	44%
イ タ リ ア	15	12	6	50%
ド イ ツ	26	24	8	33%
ロ シ ア	37	29	3	10%
ス ペ イ ン	35	34	32	94%
ポ ル ト ガ ル	22	21	13	62%
中 国	30	27	12	44%
蒙 古	6	6	2	33%
イ ン ド	10	10	3	30%
マ ラ イ シ ャ ム	14	12	7	58%
シ ャ ム	12	12	8	66%
総 計	302	274	132	48%

VI 高度経済成長から現在

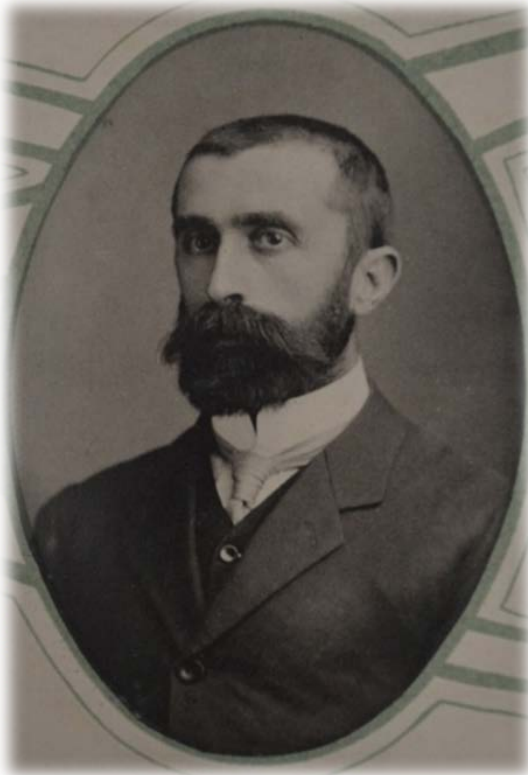
高度経済成長のなか、スペイン語就学者の就職は好調でした。神武景気が終りなべ底不況と呼ばれた1957年10月時点においても、スペイン語就学者の就職内定率は94%と他の学科を圧倒し(右図)、主として商社・銀行・メーカーに就職しました。当時の『東京外国語大学新聞』の記事によると「中南米貿易のおよびその企業進出によるスペイン語ポルトガル語が今年も相変わらず良く、スペイン語などは求人のおつた一流会社、銀行への受験者がなくなるという現象さえ呈している」ほどでした。

また1951年にはイスパニヤ科最初の女子学生が入学します。その後昭和40年代には女子学生が急速に増え、1973年にはスペイン語学科入学者61名中34名が女子学生となり過半数を占め、その後も女子学生の比率は高まって行きます。

1995年スペイン語学科は欧米第二課程スペイン語と改められ、2012年の2学部制導入により言語文化学部スペイン語及び、国際社会学部西南ヨーロッパ地域/ラテンアメリカ地域へと変わり今日に至ります。



『東京外国語大学卒業アルバム』(1985年)より、「スペイン語学原ゼミ」



II 東京外国語学校の学生たちがみたエスパルダ講師

エスパルダは、「スペイン風の黒い頬ひげ」と「長身である上に上品な風貌の持ち主」で、生徒たちからは「エスパルダさん」と慕われました。彼の教えを受けた渡辺博史(1915年卒)は、「スペイン人のエスパルダ先生は二メートル近い長身温顔の親しみ易い外国人で、主として会話を教えられたが、明快な発音と日本の学生を扱い慣れて居られたからでもあろうが、『お叔父さん』と呼んで近寄りたようなお人柄であった。日本家に住み夏は浴衣を着て庭の芝生に椅子を出し扇子を使われるなど、日本にスッカリ溶け込んだご生活の由であった。地震がお嫌いで、ある教授時間突然グラグラと来た時、顔を真っ青にして教壇の机の下に長身をもぐり込まれ震えて居られたのは、お気の毒やら、又ユーモラスなお姿でもあった」と回想しています。

I ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパルダの来日

ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパルダは、1874年スペインのサラマンカにおいて、著名な博物学者マルコス・ヒメネス・デ・ラ・エスパルダ(Marcos Jiménez de la Espada, 1831-1898年)の子として生まれました。マドリードにおいて勉学に励み、自由教育機関(Institución Libre de Enseñanza)を経て、マドリード大学で哲学・文学を修め、卒業後には海軍の古文書保管係として職を得ました。

来日の詳しい経緯は定かではありませんが、エスパルダは1907年家族を伴い、スエズ運河～インド～フィリピン経由で来日し、1916年7月まで9年半に渡り東京外国語学校の第3代スペイン語外国人講師に着任します。日本文化への関心が高かったためか、着任間もなく普通の日本家屋で畳と障子の生活を求め、赤坂に居を構えました。

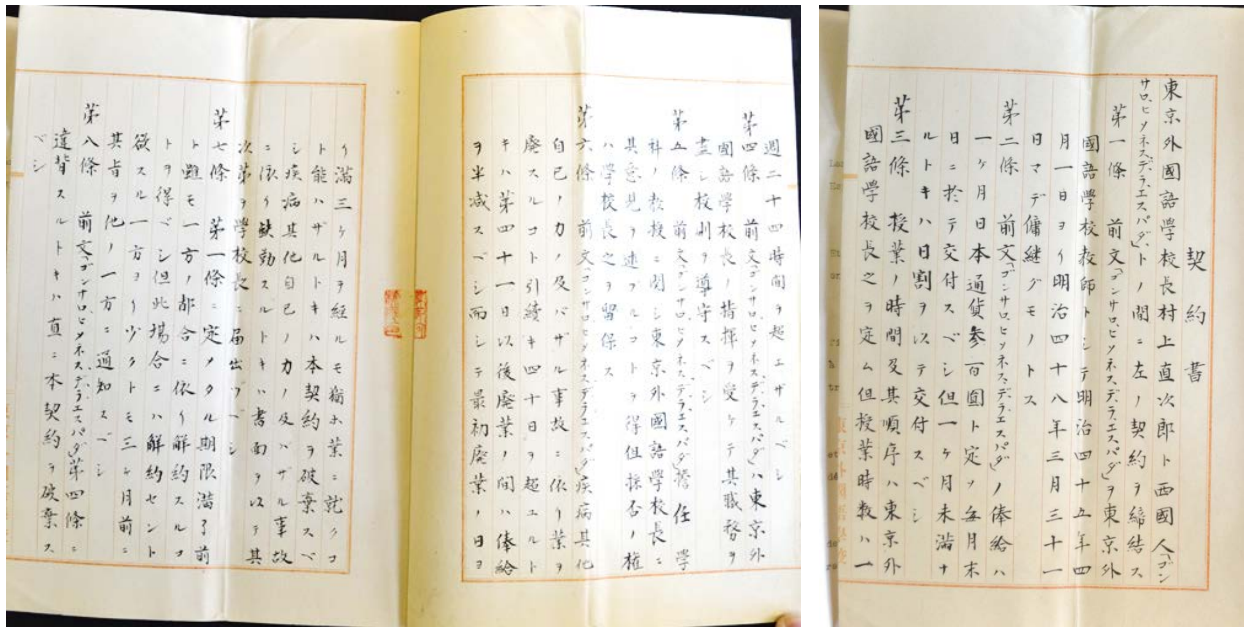


【左上】ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパルダ Gonzalo Jiménez de la Espadaの近影

【右下】1916年スペイン語学生とエスパルダ講師(前列左から2番目)。エスパルダ氏の子孫ホセ・パソー氏 José Pazó Espinosa所蔵。

【資料】ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ

の雇用契約(明治45-48年、抜粋)



エスパダ雇用契約書(1912-15年)、ホセ・パソー氏所蔵。

契約書

東京外國語學校長村上直次郎ト西國人「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」トノ間ニ左ノ契約ヲ締結ス

第一條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」ヲ東京外國語學校教師トシテ明治四十五年四月一日ヨリ明治四十八年三月三十一日マデ傭繼グモノトス

第二條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」ノ俸給ハ一ヶ月日本通貨參百圓ト定メ毎月末日ニ於テ交付スベシ但一ヶ月未滿ナルトキハ八日割ヲ以テ交付スベシ

第三條 授業ノ時間及其順序ハ東京外國語學校長之ヲ定ム但授業時間数ハ一週二十四時間ヲ超エザルベシ

第四條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」ハ東京外國語學校長ノ指揮ヲ受ケテ其職務ヲ盡シ校則ヲ遵守スベシ

第五條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」擔任學科ノ教授ニ関シ東京外國語學校長ニ其意見ヲ述ブルコトヲ得但採否ノ權ハ學校長之ヲ留保ス

第六條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」疾病其他自己ノカノ及バザル事故ニ依リ業ヲ廢スルコト引續キ四十日ヲ超ユルトキハ第四十一日以後廢業ノ間ハ俸給ヲ半減スベシ而シテ最初廢業ノ日ヨリ滿三ヶ月ヲ經ルモ猶木業ニ就クコト能ハザルトキハ本契約ヲ破棄スベシ疾病其他自己ノカノ及バザル事故ニ依リ缺勤スルトキハ書面ヲ以テ其次第ヲ學校長ニ届出ヅベシ

第七條 第一條ニ定メタル期限滿了前ト雖モ一方ノ都合ニ依リ解約スルコトヲ得ベシ但此場合ニハ解約セント欲スル一方ヨリ少クモ三ヶ月前ニ其旨ヲ他ノ一方ニ通知スベシ

第八條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」第四條ニ違背スルトキハ直ニ本契約ヲ破棄スベシ

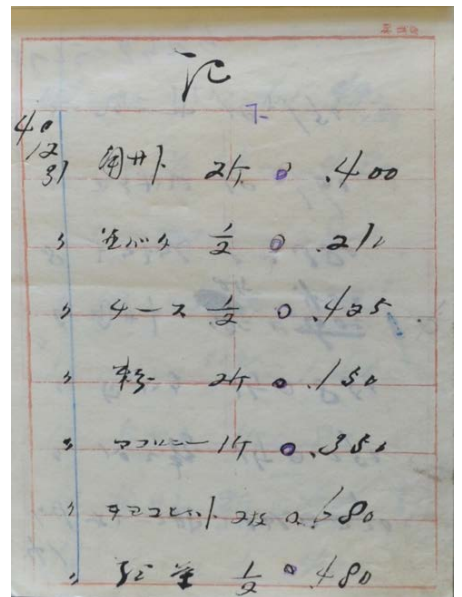
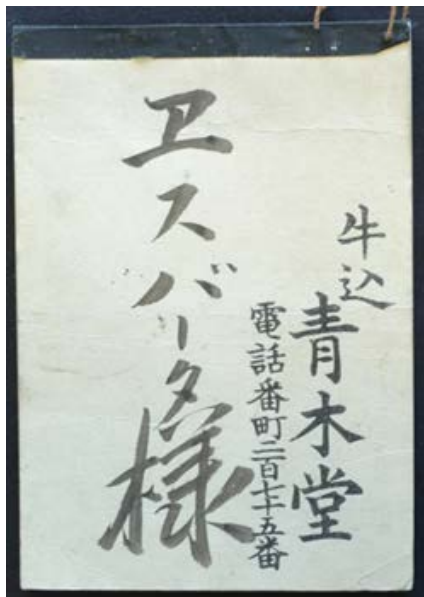
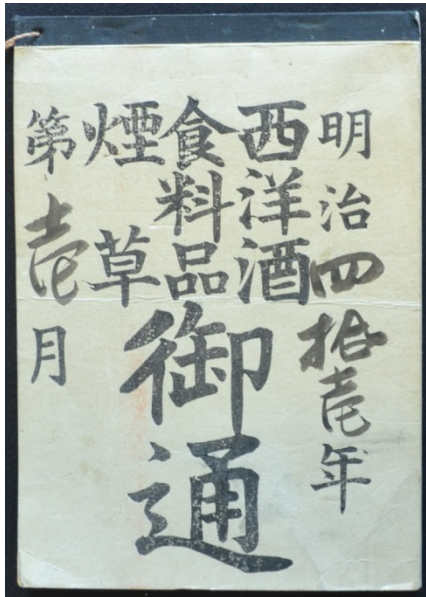
第九條 前文「ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ」ノ契約期限滿了シ其傭ヲ繼ガザルトキ及び第六條又ハ第七條ニ依リ東京外國語學校長ヨリ解約シタルトキハ歸國旅費トシテ日本通貨七百圓ヲ交付スベシ 但第七條ニ依リ前文ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダヨリ解約ヲ求メタルトキ及第八條ニ依リ解約シタルトキハ歸國旅費ヲ交付セズ

契約ノ証トシテ契約書ニ通ヲ作り各一通ヲ所持ス (...後略...)

Ⅲ エスパーダ講師の教育 ～教科書の代わりに絵カードを用いた講義～

エスパーダは日本の青年にスペイン語とその文化を伝えることを使命としており、熱心な教育者でした。教室では決して日本語を話そうとせず、授業では「教科書の代わりに、いろいろな生活場面を表わした絵入りカード」を持参し、「太いバスの中でセニョールだれそれと、いちいち生徒の名を呼んで出欠を取った後で、一枚の絵カードを一同に示しながら、それが表している事柄について説明」したそうです。1915年には多年に渡る貢献が評価され、「同校傭入以来茲二八年有餘其間常二熱心教授二從事シ功績顕著ナル者」として「勲五等瑞寶章」を受けました。

またエスパーダを師と仰いだ永田寛定は1909年の卒業と同時に講師に採用され(後に教授)、『ドン・キホーテ』をはじめスペイン文学を多数翻訳します。



Ⅳ エスパーダ講師の家族たち

来日時には既に妻イサベルと長男エドワルドを伴っていましたが、日本在住中にも1908年に娘アナが、1911年に息子リカルドが生まれ、家族は拡大しました。9年半にも及ぶ日本滞在のなか、子どもたちは日本語を自由に操るまでになったといえます。

エスパーダ一家は夏期休暇の際には東京湾の海村の保田村を訪れました。浴衣姿での写真からは日本文化を家族で楽しむ様子が伺えます。

他方で、長期にわたる日本滞在に伴う子どもたちの教育問題は、夫妻に帰国を決意させることになりました。

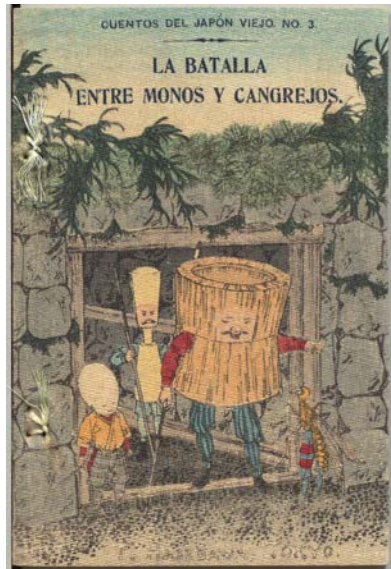
【上】牛込青木堂で食料品を購入した際の通帳。角砂糖・バター・チーズ・粉・チョコレート・紅茶の購入が確認できます。ホセ・パソー氏所蔵。

【下】は東京湾の海村の保田村における夏期休暇の様子。ホセ・パソー氏所蔵。



V 日本文化のスペインへの紹介

エスパーダは、日本文化のスペインへの紹介を志し、日本の自然に関する論考や文芸・思想等作品の翻訳を行いました。1909年には新渡戸稲造『武士道』をスペイン語翻訳し本国で出版しました。また、1914年には長谷川武次郎編集による「日本昔噺 (Japanese Fairy Tales)」の翻訳にも参与し、英語版をもとに「桃太郎」や「猿蟹合戦」等の童話の翻訳を行いました。



【左】1914年に刊行された日本昔噺シリーズ。(左)La batalla entre monos y cangrejos / [エスパダ譯]. -- T. Hasegawa, 1914. -- (Cuentos del Japón viejo ; no. 3). 猿蟹合戦E1。(右) viejecito que hacía florecer los árboles secos / [エスパダ譯]. -- T. Hasegawa, 1914. -- (Cuentos del Japón viejo ; no. 4).

【右】『SALVE SCHOLA』(1911年、東京外国語学校アルバム)はエスパーダの長女アナの手により保管され、エスパーダの一族に伝わりました。東京外国語大学文書館にも同一の資料が保管されており、約100年に渡り日本とスペインに伝わってきました。ホセ・バソー氏所蔵。

VI 帰国

1916年7月、エスパーダー家はスペインへの帰途につきます。東京駅には送迎のため、教員・生徒が多数集い、西班牙语同学会は記念として銀製紅茶出し器(竹の模様付)を送りました。「それは四品一組でそれに美事な盆が附属してその急須の糸尻には『我が敬愛するゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパダ先生へ』と日本字で鮮に刻り付けその上に各々の器には先生の名前のイニシアルを刻み付けて」あったといいます。また、エスパーダ氏帰国時には、その蔵書の大部分が東京外国語学校に寄贈されました。折しも第一次世界大戦中であり、危険な地中海航路を避け、アメリカ、大西洋を經由し帰国しました。



【右】エスパーダ氏の「勲五等瑞寶章」。国立公文書館所蔵。

東京外国語大学におけるスペイン語教育の歩み年表

西暦	概要
1897年	高等商業学校附属外国語学校創設(英仏独露西清韓の7学科設置)。西班牙語科は日本初のスペイン語専攻。
1899年	東京外国語学校独立。西語学科へと改称。
1907年	3代目外国人講師ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパーダ着任
1919年	各語学科を語部に改編、スペイン語部に改称。各部に文科・貿易科・拓殖科が設置
1944年	東京外事専門学校と改称。修業年限を3年、本科を第1部と第2部に分けスペイン語は第1部に置かれる
1945年	フィリピン科が設置、笠井鎮夫(1919年西語卒)がタガログ語担当
1949年	東京外国語大学設立。ポルトガル学科と改称(定員30名)。
1951年	12学科が7部へと再編され、イスパニヤ学科は第五部第一類と改称。
1955年	スペイン語入試倍率37倍を記録
1961年	スペイン科へ改称
1964年	スペイン語学科へと改称
1995年	欧米第二課程スペイン語へと改組
2012年	言語文化学部と国際社会学部の2学部化、スペイン語/西南ヨーロッパ地域/ラテンアメリカに分かれる。



ゴンサロ・ヒメネス・デ・ラ・エスパーダ Gonzalo Jiménez de la Espada

1874年、スペインのサラマンカ生まれ。自由教育機関を経て、マドリード大学を卒業。海軍古文書保管係に就職。1907年来日し、東京外国語学校第3代スペイン語外国人講師に着任し、9年半に渡り教鞭を執る。その間、1915年には多年の功績を讃えられ「勲五等瑞寶章」を受ける。1938年没。

【主な参考文献】

『東京外国語大学史-独立百周年(建学百二十六年)記念-』(東京外国語大学、1999年)

東京外国語大学文書館企画展 東京外国語大学スペイン語教育120年 ～外国人講師エスパーダと東京外国語学校～

2017年10月 発行

発行：東京外国語大学文書館

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 研究講義棟600号室

Tel : 042-330-5842 E-mail: tufsarchives@tufs.ac.jp

URL : <http://www.tufs.ac.jp/common/archives/>